

リチャード・ロイド・パリー

『津波の霊たち——3・11 死と生の物語』

Richard Lloyd Parry, *Ghosts of the Tsunami: Death and Life in Japan's Disaster Zone*

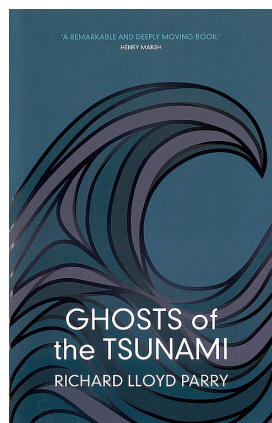
「遅読が過ぎた」読了直後の素直な感想である。本書は二〇一一年三月に発災した東日本大震災による被災者、被災地への綿密な取材をもとに構成され二〇一七年八月末にイギリスで出版されたものである。反響は大きく二ヶ月後にはアメリカで、半年も経たないうちに邦訳も刊行された。書評にあたり邦訳を対照させながら読み進めたことも遅読理由の一つである。しかし、それが主な理由ではない。濃密な情報量と見事な描写はその文字を飲み込むため反芻せざるを得なかった。また、冒頭ページに配された地図によって登場人物の住地域が確認できる。本書を読む上で津波到達時間の地域差や避難経路の想像は必須であり、当地を訪れたことのない人への理解の助けとなる。そしてもし、悲しみが可視化できるなら、悲しみの雨に打たれ続けるような読書体験となる

だろう。どうやって速読できようか。以下にページ数以上に読み応えのある内容の紹介をしたい。

著者、英国出身のリチャード・ロイド・パリーは「ザ・タイムズ」誌の東京支局長。日本在住二十年以上で、著者自身が体験した二〇一一年三月の東京の風景から幕が上がる。

本書の最大の特徴は複数のルポが小気味よく同時に進行することである。大部分は東日本沿岸被災地の中でも最大の死者を生んだしまった宮城県石巻市の遺族たちへの取材から立ち上がる個人的な物語である。その遺族全員をつなぐ関係性は「大川小学校」に子供を通わせ、学校の杜撰な避難指示により命を落としたという事実である。同じ経験をした遺族らは「子供たちがどのように死んだのか (p. 二四、一四七頁)」を知るため行政を相手に集団訴

金澤 豊



Jonathan Cape, 2017

訟を起こし、裁判結審へのあゆみが描写される。この道のりは平坦でなく、どの遺族も被災直後から同じ経験をしている人がいないことが必然的に浮かび上がるため、遺族同士が誰一人として完全には分かり合えない自覚に至る皮肉な過程でもあった。時間の経過と取材の進展によって「我が子の最期を知りたい」「過失を認めない行政を糾弾する」という共通の目的は次第に分裂していく。

本書がこの阿鼻叫喚を著述し切った要因については、複数あると考える。それは著者が取材対象者から信頼を得ていたこと、遺族の重い気持ちを引き受けてなお、行政との間で中立な立場で丹念に取材を続けたこと。加えて、次の二種の第三者性にポイントがあると考える。

まず、一つ目は「外国人から見た日本」という著者の当然の立場が度々強調される点である。これをマクロ視点と名付けたい。例えば、東京が世界有数の地震リスクに晒されながら人々が暮らしていることについて「破壊と生命の喪失をどこか深層のレベルで感受している都市 (p.158、一九七頁)」という評論を引用し、理解が難しいという態度をとる。また、もつと直截的に著者は除霊を引き受ける僧侶の態度に業を煮やす。「私としては、日本人の受容精神にはもううんざりだった。過剰なまでの我慢にも飽き飽きしていた (p.241、二九一頁)」。怒りをコントロールするのが

仏教であることに理解を示しながらも、消えない悲しみと折り合いをつけるために、ただ受容することを説くことが非業の死に直面し続けている遺族にとつて本当に正しいことなのか、読者へ問い直している。我が子の死の真相を追い求めるために立ち上がった人々は、怒りに満ち、行政に批判的で、毅然としていることを記録しつつ、著者自身は理解し難い日本人僧侶の言葉を何とか受容しようとする葛藤が見える。英語メディアであるという外部性を保っているからこそこの視点は、本書の魅力を増している。

二つ目は、反対に現場の小さな声から震災を見るところというマイクロ視点である。日本で二〇一二年の流行語大賞候補にもなった「絆」や「頑張ろう」の言葉は、被災者にとつてメディアの中心から発せられる極めて抑圧的な言葉であった。また、自然災害直後に起こる共助の精神は二〇〇九年に「災害ユートピア」(レベッカ・ソルニット)と名付けられており、アカデミック層によつて東日本大震災発災直後にも当てはまる現象だとの説明がなされた。(レベッカ・ソルニット氏も二〇一二年三月に来日し宮城県沿岸を視察、評者も同行し意見交換をした。)しかし、それらの大きな言葉によつて小さな苦悩が覆い隠され続けたことも事実である。さらに著者は、東北の人々が日本の中でも特に我慢強く「強欲と商業主義のウィルスや都会の醜さに犯されていない」村社会¹⁾を意味した。しかし、この外向きの単純なイメージは、内に根付いた保守主義

を隠すものであった (p.183、二二六頁)」と示す。このような指摘は、大川小学校を取りまく遺族を取材する中で発見し、子どもを亡くした遺族の様々な思い、訴え、軋轢を直視してきた結果である。大川小学校に関連する遺族間の問題は、当事者同士で語り合われることが目減りし、安心できる第三者に漏らされていたのである。マクロとミクロの両方の視点が織りなされて、大震災の影響は肯定的なものばかりでないことや、全員の悲しみが異なるという気づきは、評者の復興支援活動経験からも首肯できる結論の一つだ。

最後にタイトルにある「Ghosts」の示す内容について言及しておきたい。「Ghosts」は一貫して「霊たち」と邦訳されている。日本人にとつての「霊」を詳説する紙幅はないが、本書では「津波の引き起こした問題群」と読み取ることができるのではないだろうか。遺族にとつて（それがいかに悲惨なものであろうとも）我が子がどのように亡くなったのかを知ること (How) はグリーンケアに直結する。したがって、見たくないものが見える「霊」ではなく、夢の中でも、いや、私が死んでも会いたい対象のことを「Ghosts」と呼んでいる。因果の説明がつかない怪奇現象を標題としたのは、最後の Part 5 だけである。しかし、全編にわたって現世に生きる人間の死者への名残惜しさ、後悔や慚愧の念の表象である「Ghosts」を感じることができる。津波の引き起こした

問題群は時間によつて解決されるのではなく、遺族の忍耐によつて蓋をされ平生が装われているだけである。ちなみに仏教では、この現世のことを *saha* (娑婆/忍土) と呼ぶ。

東日本大震災から十年を越えた。今後、大震災に言及するメディアも一気に減少するだろう。そんな中でも当時の息吹(喪失感、嫌悪感、やるせなさ、それらを抑え込むための冷静さ)を、そのまま保存することに成功した貴重な書である。また「十年を越えた」という事実は被災された人々にとつて何の薬にもならない。何年経つても津波記録の動画はもちろん、震災関連本や津波を想起させるようなアートにも触れられないままという友人もいる。生き残った申し訳なさを抱えたまま亡くなった知り合いも増えてきた。子供のみならず被災者のトラウマのケアは、実際のところほとんど進んでいない。その意味で、本書は東日本大震災を知らない世代には強く勧めたい。また、評者の知る大川小学校横の旧北上川河口は、穏やかなものである。淡水がじんわりと追波湾の海水に流れ込むように、いつの日か東日本大震災で被災された方にも本書の存在をお伝えしたいと考えている。

*邦訳『津波の霊たち——3・11 死と生の物語』(濱野大道訳、早川書房、二〇一八年)の該当ページを漢数字で表記した。